

氏 名	はや かわ ふみ とし 早 川 文 敏
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 364 号
学位授与の日付	平 成 18 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	文 学 研 究 科 文 献 文 化 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	セリーヌ『城から城』の政治性に関する考察

論文調査委員	(主 査) 助教授 増 田 眞 教授 田 口 紀 子 助教授 永 盛 克 也
--------	---

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、20世紀フランスの代表的小説家の1人であるセリーヌ（1894-1961）の『城から城』（1957）に関する研究である。セリーヌの代表作は1932年の『夜の果てへの旅』であるが、『城から城』は反ユダヤ主義と対独協力の罪によって第2次世界大戦後の一時期を獄中で過ごしたセリーヌが、戦後のフランス文壇で再び認められるきっかけとなった作品である。内容は、大戦末期、ドイツのジグマリンゲンに避難していたパタンやラヴァルなどヴィシー政権の主要人物たちとの生活を描いたもので、歴史的事実にもとづいているがフィクションの要素もがなり加わっている。

セリーヌは1952年と54年に発表した『またの日の夢物語 1, 2』で、デンマークの刑務所に収監されたことへの私的な恨みを延々と語るというスタンスを取り、文学的な評価をまったく受けられずに終わった。『城から城』がそれら前作と大きく異なるのは、自分だけでなく、後世の歴史観に顧みられることなく消えていった日陰の者たち、政治家のような積極的な対独協力者、状況に流された一般市民からなる消極的な対独協力者など、さまざまな人の声を文学作品を通して語り継ぐとしている点である。これは「城から城」が多くの読者を集めた理由の一つと思われる。

本論文は『城から城』における作者の政治意識を読解することを主眼としており、第2次大戦後のフランスにおいて、対独協力という自分の過去をいかに正当化して戦後フランスの文壇に復権を果たすか、というセリーヌ自身の関心事との関連でこの作品が分析されている。そのような視点から、いくつかのエピソードに与えられた意味が考察され、セリーヌの実際の経験、歴史的事実、登場する人物の小説内の人物像と実際のありようとの違いなどをもとにして考察が進められている。

全体は4つの章に分けられている。

第1章は「見えない挑発―「サン＝ピエール＝エ＝ミクロン総督」をめぐる考察―」と題され、サン＝ピエール＝エ＝ミクロンというカナダ沖のフランス領をめぐるエピソードについての考察である。作中では、作者がヴィシー政権首相のラヴァルに対して、その領土の総督にしてほしいという希望を表明する場面があり、物語の本筋とはまったく無関係の地名が登場するため読者は唐突な印象を受ける。従来の解釈では、セリーヌ自身がその土地を訪れたことがあるという事実によってそのエピソードが説明されてきた。しかし論者はサン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島の歴史を詳細に調査し、その総督になりたいというセリーヌの希望が感傷的な思いから生まれたのではないことを論証している。その諸島は北米に残っている唯一のフランス領であり、第2次世界大戦中はイギリス、ドイツ、ヴィシー政権、ド・ゴールの率いる自由フランスによる争奪の対象となった。そしてその諸島を制圧したのは自由フランスであり、それがその勢力の最初の勝利となった。そのような意味で、そのエピソードが一見意味不明でありながら、フランスの植民地政策の歴史や大戦中のさまざまな国や勢力の間の攻防を踏まえていること、そしてレジスタンスや戦後のフランス政治において重大な役割を演じたド・ゴール派に対する辛辣な当てつけであることが論証されている。

第2章「復権を賭けて―政治家ラヴァルの人物像―」では、ヴィシー政権の首相で対独協力の中心的な役割を果たしたラヴァルの、『城から城』の中の人物像が考察されている。この作品ではヴィシー政権当時の国家元首フィリップ・パタン、

首相ピエール・ラヴァル、駐仏ドイツ大使アーベッツなど重要な政治家が実名で登場し、中でもラヴァルは知名度が高いだけでなく小説中で丁寧に語られ、セリーヌと親密であった印象を与えている。彼に関する最も重要なエピソードはジグマリンゲンの駅で暴動が発生しそうなところを鎮めるという場面であるが、それは史実にはないエピソードであり、しかもラヴァルが英雄的な指導者であるかのような書き方がなされている。このエピソードは初期草稿ではなく、初期草稿にあった、ラヴァルへの反感を示すエピソードが決定稿では削除されていることなどから、創作過程でラヴァルの人物像が変化したことが浮き彫りにされている。ラヴァルのような人物を好意的に扱うことは読者や世論の反発を買うおそれがあったはずであるが、論者によれば、セリーヌは戦後のフランスにおける対独協力についての世論の変化を考慮に入れている。そしてそこには対独協力者全般に対する評価を高め、それによって自分の復権も果たそうというねらいがあるものと解釈されている。

第3章は「年代記における偽名—ドイツ人ラウムニッツ親子をめぐって—」と題され、作中に登場するゲシュタポの責任者とその娘ヒルダに関する考察である。セリーヌは反ユダヤ主義者であったにもかかわらず、ドイツ人とアラブ人の混血の女性を登場させ、しかもヨーロッパ人女性であるかのように白い肌と金髪の美しさを讃えているのはなぜか、という疑問がこの章の出発点となっている。この問題に関連して、セリーヌが反ユダヤ主義者であっただけではなく、混血に対しても批判的であったことなど、彼の人種観の諸相が考察されている。さらに、このラウムニッツという作中人物のモデルとなった、大戦中のパリでのゲシュタポの責任者ベームブルクに関するさまざまな事実が紹介されている。その人物はフランス人警官ヌヌイユに密告されてヒトラーに敵視されていたことなどが明らかにされ、それは論者によればフランス人読者の反感をあまり買わない人物像として設定されているためである。つまりこのラウムニッツという人物像は、フランス人对ドイツ人という単純な善悪の構図を否定するという、対独協力者として糾弾されていたセリーヌならではのメッセージが表れた部分とされている。娘ヒルダの人物像も、ラウムニッツの人物像を肉付けする重要な要素の1つだったと論者は主張している。ドイツ人将校がアラブ人女性と結婚して美しい娘をもうけたという設定は、ラウムニッツがナチス将校についての常套的なイメージ通りの偏狭な人種差別主義者ではないことを示し、いい意味での意外性を作りだしている。ただ、それはセリーヌの思想が変わったことを意味するのではない。『城から城』にはフランス人全体に過去の見直しを求め、自らの社会的認知と文学的復権を測るための隠れた仕掛けが多く、ラウムニッツ親子の人物像もそのようなものの1つとしてとらえられるべきであると論じられている。

最後の第4章「敗者の視線—シャトーブリアンによる「ドレスデン破壊」—」は作中人物の一人シャトーブリアンが夕食会に際してドレスデン磁器を破壊するというエピソードについてである。その場面は、セリーヌがドイツ大使アーベッツに招待されて食事をしていたところ、同席していたシャトーブリアンが突然怒り出して暴れ出す、というものである。ここでシャトーブリアンは大量のドレスデン磁器を破壊するが、この理不尽な行為が有名なドレスデン爆撃を暗示していると論者は解釈している。この場面はまず表面的には、敵であるアーベッツらに対して理不尽な危害が加えられること自体から笑いが生み出され、そして現実から目を背けるアーベッツに対して敗北しつつあるドイツの姿を示すという攻撃的な批判が表現されていると論者は指摘している。しかしこの事件の背景となった当時の国際情勢や後世への影響を考慮すると、シャトーブリアンの身なりや発言も含めたこのエピソードを彩る笑いの表現と、ドイツに対して警告する作者の姿の現れというレベルの下に、より重要な意味合いをもつ次元があることが明らかにされている。つまりシャトーブリアンという、セリーヌよりも強くドイツに傾倒していた熱心な対独協力者が連合軍による爆撃を再現してみせるという点が、作者の嫌悪する対象、彼が理不尽な戦争の勝者と見なす連合軍に対する批判的アイロニーを生み出している。

また論者によれば、この場面は連合軍によるパリ爆撃という、フランス人にとっては思い出したくないできごとを思い起こさせるためのエピソードでもある。ドイツによる占領が始まって間もない頃、フランスの新聞は連合軍によるこの空爆を非難する声明を幾度も出し、その主張を支持する文学者のリストを掲載していた。しかし時間が経つにつれ戦局が変わり、ドイツと協力して作り上げるはずだった「新しいヨーロッパ」の未来に疑問が生じてくると、爆撃を批判する者の数は次第に減っていった。セリーヌの目から見れば、これもまた時流に乗る行為、つまり自分と異なり最初から完全に立場を決定していない者だけが使える生き残りの手段であり、許容しがたいものだったと解釈されている。

セリーヌがこの場面で行う挑発は、戦後の国際秩序の中にいる者、特にフランス人にとってはきわめて政治性を含んだもの

のとなっている。爆撃を経験したセリーヌが受けた衝撃、それを描いた際の文学的表象の強さに言及する研究者もいるが、論者によれば、「選ぶべき立場を間違えた」と繰り返し訴えていたセリーヌが後世に最も強く印象づけたかったメッセージは人類に普遍的な不幸でも、文学表現の挑発でもなく、「戦争の敗者からの視線」である。

以上のように、『城から城』には一見意味不明のエピソードの中に作者による挑発が隠されていることが多いことが本論文によって明らかにされている。この4つの章はそれぞれ自由フランス、対独協力政治家、ドイツ人、連合軍といった、戦争の状況をいっそう複雑なものにしたさまざまな立場の存在に関する言及ともなっている。この小説で扱われる題材、つまり戦時の現実にかかわる人物や歴史的事実という題材は、そもそもセリーヌが世間の耳目を集められると判断して選んだものである。だからこの小説が政治性をもっていると言うとき、単に過去の政治的状况を描いているという意味でなら、そしてまたそのような言及に触れながら自らの政治姿勢については開き直るセリーヌの明白な挑発的態度が表れている、という意味でなら、それはあまりにも当然のことである。しかし論者が強調しているのは、文学表現の中に一見わかりにくい形で政治性が織り込まれているという点である。この作品は文学研究者、文芸批評家たちの立場からは純粋に文学的成果として扱われることが多いが、以上のように実際には作者の政治的メッセージを伝えるための手段として非常に巧妙な形で機能しており、そのような事実を示すことが本論文の主要な目的である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、20世紀フランスの小説家セリーヌ（1894-1961）の『城から城』（1957）に関する研究である。セリーヌの代表作は1932年の『夜の果てへの旅』であるが、『城から城』は反ユダヤ主義と対独協力の罪によって第2次世界大戦後の一時期を獄中で過ごしたセリーヌが、戦後のフランス文壇で再び認められるきっかけとなった作品である。大戦末期、ドイツのジグマリンゲンに避難していたベタンやラヴァルなどヴィシー政権の主要人物たちとの生活を描いた作品で、歴史的事実にもとづいているがフィクションの要素もかなり加わっている。

本論文は『城から城』における作者の政治意識を読解することを主眼としており、第2次大戦後のフランスにおいて、対独協力という自分の過去をいかに正当化して文壇に復帰するか、というセリーヌ自身の関心事との関連でこの作品が分析されている。そのような視点から、いくつかのエピソードの意味が考察され、セリーヌの実際の経験、歴史的事実、登場人物の小説内の人物像と実際の姿との違いなどをもとにして考察が進められている。

全体は付属資料を含めてA4判で237ページあり、4つの章に分けられている。

第1章は作品に登場するサン＝ピエール＝エ＝ミクロンというカナダ沖のフランス領をめぐるエピソードについての考察である。作中では、作者がヴィシー政権首相のラヴァルに対して、その領土の総督にしてほしいという希望を表明する場面があり、それがフランスの植民地政策の歴史や大戦中のさまざまな国や勢力の間のその土地をめぐる攻防を踏まえていること、そしてド・ゴール派に対する辛辣な当てつけであることが論証されている。この部分は先行研究の参照も丁寧になされ、従来見過ごされてきたエピソードの政治的な意味が説得的に浮き彫りにされている。

第2章では、対独協力の中心的な役割を果たしたラヴァルの、『城から城』の中での人物像が考察されている。論者によれば、セリーヌは史実にはない事件を挿入して英雄的な指導者という性格を与えたり、初期草稿にあったラヴァルに対する反感を示す箇所を削除するなど、実際にはラヴァルに対してかなり批判的であったにもかかわらず、より肯定的な描き方をしている。そこには対独協力者全般に対する評価を高め、それによって自分の復権も果たそうというねらいがあるものと解釈されている。セリーヌとラヴァルの関係、大戦末期の対独協力者たちの運命などの歴史的事実、さらに作品の初期草稿におけるラヴァルの人物像とその変遷、戦後フランスにおける対独協力者をめぐる世論の変化、などの調査が詳細になされている。

第3章は作中に登場するゲシュタポの責任者とその娘に関する考察である。セリーヌは反ユダヤ主義者であったにもかかわらず、ドイツ人とアラブ人の混血の女性を登場させ、その白い肌と金髪の美しさを讃えているのはなぜか、という疑問を出発点にして、対独協力者のイメージをよくするために好感の持てるドイツ人を舞台に乗せることが目的であったと結論づけている。ほかの部分に比べて、推測に頼る割合がやや多くなっているが、着眼点が面白く、作中人物と実在のモデルとの比較やセリーヌの人種観などについて、丹念な調査がなされている。

第4章は作中人物の一人シャトーブリアンが夕食会に際して、ドレスデン磁器を破壊するというエピソードについてである。論者によれば、その破壊行為の叙述によって連合軍によるドレスデン爆撃が非難されている。セリヌとシャトーブリアンの実際関係、作品中のエピソードと実際のできごととの相違、ドレスデン爆撃の経緯と当時の反応など、多面的な調査がなされており、この爆撃が軍事的には意味のなかった無差別爆撃であったという非難や、大戦中の連合軍によるパリ爆撃という、フランス人にとっては思い出したくないできごとを思い起こさせるためのエピソードであると解釈されている。

以上のように、多くのセリヌ研究では戦間期の作品に重点が置かれてきたのに対して、第2次世界大戦後の作品の意味を当時の状況の中でとらえ直そうという本論文の意欲と独自性は評価されるに値する。大戦末期にセリヌが実際に接した人物の特徴と言動、大戦後のフランスの世論などについて詳細な調査がなされたことを感じさせる内容であり、考察と目的の間に一貫性が感じられる。セリヌについてだけではなく20世紀フランス史の一断面についても多くの知見をもたらしてくれる点でも興味深い研究である。

もちろん、改善すべき点がないわけではない。調査についてはかなり努力の跡が見られるが、二次資料に頼る部分がやや多いのが残念である。また、歴史的状況や伝記的事実などの調査はよくなされているが、文体や語りの手法など、作品自体についての考察との有機的な関連づけが今後望まれるところである。しかしそれは本論文の価値を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものとして認められる。2006年4月5日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問をおこなった結果、合格と認めた。